

# 善いことをするときの 心づかい



家族のため、友人のため、会社のために何か善いことをしようとするとき、あなたは心に何を思うでしょうか。相手から感謝されたい、賞賛されたい、みんなから認められたい……。ともすると、そんな「見返り」を期待して、自分の行動を決めてしまうことがないでしょうか。

今回は、善いことを行うときの心づかいのあり方について考えてみます。

## ゴミ一つない歩道、募るイラ立ち

十月初旬のある日の朝、埼玉県内のA市郊外にある「株式会社堀川マシン工業」の事務室には、いつもより早く電気が点

りました。あと五分ほどで午前八時です。

その日、朝一番に出社してきたのは、社長の堀川剛さん（39歳）。自動車用部品を製造する堀川マシン工業は、三十五年前に堀川さんの父親が設立した会社です。堀川さんは今年の六月から二代目社長として、社員二十名の生活を守る重責を担っ





ています。

堀川さんは自分のデスクにつくと、カバンを置いただけで、再び事務室を飛び出し、工場に面する外の道路へ向かいました。そしてそこに着くや、ホウキを片手に、歩道の掃除掃除を始めたのです。

周辺には住宅地もあり、学生服姿の通学生たちが、堀川さんの姿をもの珍しそうに見ながら、通り過ぎていきます。

時刻が八時を回ると、一人、二人と社員が出勤してきました。

「あっ、社長。おはようございますっ」  
自転車に乗ったある若い社員が、堀川さんの横で止まりました。

「おう、伊藤くんか。おはよう」

「社長、朝からどうしたん

ですか」

「いや……、まあ、私もちよつと心を入れ替えようかと思つてね」

「はあ。ご苦労さまです。失礼します」

立ち去る社員の背中をしばらく見送つた後、堀川さんは再び地面に顔を向け、ホウキを動かし始めました。

「社長、手伝いましょうか」くらい言つてくれてもいいだろうに。まあ、まだ初日だからしょうがないか」

大半の社員は八時二十分すぎに、バタバタと出勤してきます。みんな、堀川さんの姿に、驚いた表情をしながら、先を急いでいきます。

全員の出社を見届けてから、堀川さんはゴミを集め、工場へ戻つていきました。

堀川さんの歩道掃除は、翌日も続きま

す。やがて十日も経つと、社員もその光景に見慣れ、何事もなにかのように、堀川さんの脇を通り過ぎていくようになりました。

堀川さんのおかげで、工場周辺の歩道は、毎日ゴミ一つない心地よい状態に保たれるようになりました。しかし、堀川さんの胸中は穏やかではありません。毎日率先して掃除をする自分の姿を誰一人として見習おうとはせず、感謝の言葉さえ返つてきませんでした。そのような社員に対するイラ立ちが募るようになっていたのです。

そうして二週間を過ぎたころからは、時間ギリギリに出社してくる社員に冷たい視線を送つたり、わざと大げさにゴミを掃き集めるようにもなつたのでした。

# 人間性を高めるために

堀川さんが掃除を始めてから三週間目の昼休み。社内の休憩室では、社員たちがこんな会話をしています。

「近ごろ若社長、朝が早いな。いつたい何時ごろから来てるんだろう」

ある年配の社員が、傍らにいた新米の伊藤くんに見せました。

「はあ。僕が八時すぎに来るときには、もう掃除されているので、その前からですね」

「どんな風の吹き回しかな。前はおれたちと同じくらいの時間に来ていたのに。歩道はきれいになったが、あまりこれ見



休憩室

よがしにやられると息苦しいなあ」

脇で聞いていた社員が口を挟みます。

「まあ、どれだけ続くか見ものだね」



堀川さんが今年、社長に就任するとは、周囲はもちろん、本人さえ予想していなかったことでした。毎日忙しく駆け回っていた創業者の父親が突然倒れ、息をひきとつたのは今年五月のこと。堀川さんは

大学卒業後、他社に十年勤めて経験を積み、五年前に堀川マシン工業へ入ったばかりです。「こうなったら、やるしかない」と覚悟を決め、まずは社内をまとめようとリーダーシップを発揮する堀川さんでしたが、気負いすぎて空回りの連続、

なかなかうまくはいきません。

堀川さんが朝の掃除を思い立つたのは、先月参加した地元の商工会議所主催で開催された経営者セミナーで、「中小企業は、社長の人格いかんで決まる」「社長が人間性を高める努力をすることで、やがて会社の社風もよくなり、全社一丸となった活力が生まれてくる」という話を聞いたことがきっかけでした。

「人間性を高める努力か……。講師の話の中に、社長みずからが率先して掃除をしている企業の話があつたけれど、手始めに社員が毎日通る歩道の掃除でも始めてみよう」

そう思い立つた堀川さんでしたが、人間性を高めるどころか、なぜか社員を責める心が日に日に増してくるのです。

# 「もう、う、ちやめようか」

社員たちが休憩室で噂話うわさばなしをしているこ

ろ、堀川さんは商工会議所の先輩で、菓子原料の製造業を営む塩山しおやま一義かずよしさん（64歳）の会社を訪ねていました。堀川さんの

父親の親友だった塩山さんは、堀川さんのよき先輩経営者として、時折ときおり、昼食を共にしては相談に乗っています。

「先日のセミナーでは、ずいぶん剛くんも感じ入った様子だったけれど、実際にか何を始めているのかなあ？」

食後のコーヒーを飲みながら、塩山さんが堀川さんに語りかけます。

「はい。翌日から早速、掃除を始めまし



た。毎日社員が通勤している道をとって、今朝で三週間目なんです……。実は、もうやめようかと思っています」

苦々にがにがしそうな表情で答える堀川さん。

「ええっ、せっかく決めたことなのに、もうやめようなんて……。きつと社員や地域の人には喜ばれているはずだよ」

「でも、正直言って、始める前はずっと社員からも見習う者が現れるだろうと期



待していたんですが、それが全く誰もいなくって。それでなんだか一人でコッコツやっていても意味がないんじゃないかと、バカらしく思えてきたんです」

「でも剛くんは、そもそも社長として自分の人間性を高めたいと思つて掃除を始めたんだろう。それなのに、社員が手伝わないからやめようというのは、ちよつと話が違うように感じるけど」

「ええ、まあ……」

「早く社員から認められたいという気持ちには分かるけれど、何事も一朝一夕いちせういつせきにできるものはないと思うよ」

塩山さんはそこでいったん言葉を切ると、おもむろに語りかけました。

「剛くんは『陰徳』いんとくという言葉を知っているかい？」





# 陰徳を積む

「陰徳とは、陰で徳を積むことで、世間に知られていない善行や隠れた功績のことを言うんだ。」

成田山新勝寺参道筋



江戸時代の商家や老舗には、この陰徳を積むことを家訓や信条としていどころが多くあるんだよ」

そう言う塩山さんは、陰徳によって運を開いた経営者の話を始めました。



千葉県成田市にある名刹・成田山新勝寺の参道筋で、百年以上商いを続ける老舗和菓子店「米屋」(現在の店名は「なごみの米屋」)。創業当時、すでに参道筋には数十軒の羊羹店があり、その中で後発組の米屋が発展することができたのは、創業者の諸岡長蔵氏が積んだ陰徳がありました。長蔵は生まれながらに病弱で、二度までも死線をさまよう経験をしましたが、



十六歳のときに「心のつかい方しだいで、逆運もまた幸運に転ずることができると知り、以後「人を助けてわが身助かる」を生涯の信条として実践した人でした。

米屋を創業した当時、成田山の参道筋では派手な包装でごまかした粗悪品を並べて、値段をふっかけながら強引に客の袖を引くという、不正な商法で利益を得る商売人もいました。そんな中、長蔵は一切不正をしない経営方針を掲げ、誠実な商売に徹しました。長蔵の商法は、値引きを期待する客や周囲の土産物店から「そんな生真面目な商法を」と一時は反感を買い苦境に陥ります。しかし、やがて口コミで遠方から買い求めに来る人が現れるほど繁盛します。

その後、多くの利益が出るようになって

ても、長蔵は質素な衣食住のまま、自身の家財を貯えようとはせず、「米屋が今あるのはここ成田のおかげだ」と地域の公事業のために寄付を続けます。金額は累計すると莫大な額になりましたが、長蔵は決して誇ることなく、自分の名前を伏せ続け、成田の町づくりに多大な貢献を続けました。



# 心の持ち方しだいで

「僕が米屋さんの話で剛くんに伝えたいのは、長蔵さんの心の持ち方なんだよ」「心の持ち方ですか？」



「そう。例えば地域に百万円寄付したという場合、それを人に知られないように

やっても、名前を出して行っても、地域に役立つ百万円が寄付されたという事実に変わりないね。でも、名声や自己の利益を胸算用してするのは、地域のためと純粋に思っているのでは、心のあり方がまるつきり違うだろう」

「確かに……。ただ、せっかく自分が時間とお金の犠牲を払ってしたことに対して、何も返ってくるものがなければ、損しただけのように思うのですが……」

塩山さんは答えます。

「では、長蔵さんは人知れず寄付を続け、損だけして終わったと思うかい。そ

うではないだろう。長蔵さんは見返りを求めずひたすら陰徳を積み、自身の人間性を高めたことで、結果的に地域の信頼を得て、米屋百年の礎を築いたんだ。

剛くんはせっつかく毎朝掃除をするという善行を積みながらも、心の中で「社員からの尊敬を集めたい」「社内をまとめたい」という見返りばかり求めてしていたのではないかな」

自分の心中をずばり言い当てられて、苦虫を嘔み潰したような表情の堀川さん。「要は人間性や人格を高めたいと思えば、どんな心づかいでやるかが重要だということだよ。どうだろう、だまされたと思って、明日から社員が出勤してくる前に掃除を済ませるようにしてみてはどうかな？ 何かが変わるかもしれない」



# 見返りを考えない善行

員を責めてばかりいた。でもそこから生まれたのは、

会社に戻る道すがら、堀川さんは今朝

までの自分を振り返ってみました。

確かに、僕はよいことをしている、自分は偉いと思いがあって、見習わない社

自分も社員も不快な思いをする悪循環あくじゆんかんだけだった”

翌日の早朝。堀川さんは午前七時に会社へ向かいました。そして、出勤の早い社員が現れる八時前までに掃除を終えました。その後は、何事もなかったように社長室で仕事に取りかかりました。

”社員に掃除をやめたように思われないかな。三百坊主の社長と思われないかな”  
最初はそんな思いが心をよぎりましたが、一週間、二週間と早朝に掃除を続ける間に、そうした不安はいつしか消えていきました。



「みんな、ごめん……。さぞかし朝から居心地の悪い思いをしていたろうな」

自然とそんな思いも込み上げてくる堀川さんでした。

あらためて掃除を始めてから一か月が過ぎたころ、いつものように道路のゴミを拾っていると、「いつも、ありがとうございます」という声がしました。

出勤してきた社員の伊藤さんから、堀川さんはそんな言葉を投げ掛けられたのです。

「あ、おはよう」

「いつも早朝から道を掃除していただいて……ありがとうございます。私も手伝わせてください」

その言葉に堀川さんは驚くのでした。

## 薄紙を積み重ねるように

「言うは易く、行うは難し」とよく言わ

れますが、モラロジを創建した法学博士・廣池千九郎は「言うは易く、行うも易く、心づかいは極めて難し」という言

葉を遺しています。

道端のゴミを拾う、お年寄りを気づかう、寄付をするといった行為は努力すれば可能です。ただ、いくら善いことをし

ても、その心づかいが悪ければ、かえって悪い結果をもたらすこともあるものです。

会社に限らず、家庭でも、会社の中でも何か人のためによい行動をしようとするならば、見返りを期待しないで、相手の幸せや喜びを願いながら行いたいものです。



私たちは毎日、多くの人とのかかわりの中で善事を行う機会を得ています。その時々、薄紙うすがみを一枚一枚積み重ねるように、自分の心と向き合い、みずからの人間性の向上に努めていきたいものです。そのような努力が、私たちの人生を必ず豊かなものに導いていくことでしょう。